

GODZIPPENHEIMER

核の脅威と希望を見つめる視点の旅

GODZILLA



OPPENHEIMER



先月、日本被団協がノーベル平和賞を受賞し世界中で話題となった。ではアメリカと日本では核兵器に対してどのような認識の違いがあるのだろうか？

セリフの抜粋

オッペンハイマー：

『真珠湾や太平洋で3年間日本と残酷な戦争をしてきた、（日本に原爆投下しても）アメリカ人はやむを得ないと思う』

『全ての戦争を終わらすために』
戦争中アメリカに逃亡してきたボーアがオッペンハイマーに「開発中の原爆は十分に大きいのか」と聞き、それに対してオッペンハイマーが「この戦争を終わらせるために？」と聞き返すしたあとの回答。

『我々が水爆を作ればソ連も作らざるを得なくなる』
オッペンハイマーは、ソ連との核競争を避けるために水爆の開発に反対したが、一方で、ストロースはソ連が持っているものよりも強力な核兵器を持つことで抑止力を高めるべきだと主張した。

ゴジラ：

『あのゴジラが最後の一匹だとは思えない。もし、水爆実験が続けて行われるとしたら、あのゴジラの同類が、また世界のどこかへ現れてくるかもしれない…』

『原爆対原爆、水爆対水爆、その上さらにこの恐ろしい恐怖の兵器を人類の上に加えることは、科学者として、いや一個の人間として許すわけにはいかない。』

相違点

アメリカ：

- 原爆はアメリカ人の命を救った「救世主」
⇒神の思し召し
- WWIIはアメリカの「最善最良の戦争」、日本への天罰
- 「オッペンハイマー」は「神の力」（核）をむやみに使い、核競争に持ち込んでしまったことへの反省が大きい。
- アメリカ人の戦争と核への想像力の欠如の風刺

日本：

- 戦争と原爆のトラウマ「水爆大怪獣ゴジラ」
- 第五福竜丸事件の影響
- リアルな核の怖さを描写、明確な「反核」
⇒日本の戦後平和教育（戦争への恐怖）

共通点

- 原子力の神格化
- 核兵器への「畏怖」
- 反戦



核と人類の未来

ITER計画

ITERは、平和目的の核融合エネルギー核融合実験炉を実現しようとする超大型国際プロジェクトであり、2025年の運転開始を目指して日本、欧州、米国、ロシア、韓国、中国、インドの7極が共同で進めている。

	核融合発電	核分裂発電（従来型）
エネルギー効率	燃料1g ≒ 石油8t	燃料1g ≒ 石油1.8t
放射性廃棄物	処理に約100年	処理に約10万年
安全性	暴走や爆発の危険なし	メルトダウンの危険性

結論

- 日米の核兵器への認識の違いは主にWWIIでの立場の違いから生じたものである。
- 核への本能的な恐怖心は日米で共通していた。
- 核の平和利用は全世界で進められており、未来には破壊の象徴ではなくなるであろう。

参考文献

- U-next, 「オッペンハイマー」, <https://qr.paps.jp/YtIGR> (最終閲覧日：2024年10月25日)
- Amazon prime, 「ゴジラ」, <https://qr.paps.jp/z8KxE> (最終閲覧日：2024年10月25日)
- 旧約聖書「創世記」（新共同訳）
- 池田淑子, 「アメリカ人の見たゴジラ、日本人の見たゴジラ」大阪大学出版社, 2009年, p24

- マイケル・ゴードン, 「原爆投下とアメリカ人の核認識: 通常兵器から「核」兵器へ」, 彩流社, 2013, p56-81
- 山本昭宏, 「核と日本人ーヒロシマ・ゴジラ・フクシマ」, 中央公論新社, 2016, p12-p25